

近世から近代における古墳に関する歴史探究の変化と連続

CHANGES AND CONTINUITIES IN HISTORICAL INQUIRY ABOUT KOFUN FROM THE EARLY MODERN PERIOD TO THE MODERN PERIOD

竹内 祥一郎 (京都府立大学大学院)

TAKEUCHI SHOICHIRO (GRADUATE STUDENT, KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY)

遺跡の認識 / RECOGNITION OF HISTORIC SITE

考古学史 / ARCHAEOLOGICAL HISTORY

近世・近代 / EARLY MODERN AND MODERN

京都盆地 / KYOTO BASIN

はじめに

今日の文化遺産としての古墳像とはうらはらに、古墳が生業の場であり、畏怖や信仰の対象であったことは本特集の恵谷報告の通りである。一方で、こうした生活・生業上の関わりとは別に、古墳に対して地域の外部から熱いまなざしを注ぐ人々が存在してきた。その典型例が考古学者らであることは言うまでもないが、近代考古学成立以前にも、近世知識人たちは古墳に関心を抱いてきた。

考古学者や知識人はともに、古墳(やその遺物)を通して歴史を探究しようとする思索主体である。本稿では、古くは10世紀から考古学的な思索や実践が蓄積されてきた京都とその周辺からなる京都盆地を舞台に¹⁾、彼らの近世から近代にかけての知的実践のあり方を捉え、その連続や変化を素描したい。

1. 近世社会における 古墳をめぐる歴史と伝承の生産・流通

(1) 古記録と伝承から「塚」をとらえる

日本近世において古墳はどう認識されてきたかについては、これまで考古学史的な関心から検討が加えられてきた。とりわけ、幕府の山陵調査・保護に関しては文献史学からも着目されており、天皇陵創出にかけての道程が示されている²⁾。

ここでは、こうした政治史的な問題からはやや離れ、近世知識人たちが、古墳を前にしてどういった思索の

手続きを踏んで過去に遡ろうとしたのかを見ていきたい。その際、古墳が表象された地誌類を検討に用いる。

近世を通して、地域の歴史や地理を叙述する地誌や名所案内記は出版文化の隆盛も相俟って作成が活発化した。その作成・出版の先駆的な中心地であった京都では、同地を対象とした30点以上の地誌・案内記が出版された³⁾。その1つのピークは17世紀後半から18世紀初頭にかけてのいわゆる元禄期である。近世京都での考古学的な実践や思索について、山田は国学や尊王思想の隆盛を背景とした18世紀後半以降の展開を指摘している⁴⁾。以下では、これに先行する元禄期の考古学的知の展開を注視したい。

元禄期の京都で出版された地誌のなかで、恵谷報告の表1に取り上げている正徳元年(1711)刊行の『山州名跡志』22巻は、とりわけ史跡や名所に関する記述が詳細である。『山州名跡志』の作者は僧侶の釈白慧(1648-1717)である。彼は俗名を坂内直頼といい、もと岡山藩の武士の出身で、牢人して京都に滞在していた⁵⁾。『山州名跡志』「序」によれば、白慧は古記録と現地調査を駆使し、20余年にもわたって山城国内の「芳跡」の来歴を考証したという。

こうした遺跡に対するアプローチは、古墳に対しても遺憾なく発揮される。前方後円墳への考証の全体像は恵谷報告の表1に示した通りだが、そのなかで白慧の歴史探求の過程をよく示す例を紹介しよう⁶⁾。

●高昌陵 延喜式ニ載ス乙訓ニ在リト云々。今詳シカラズ。但シ井内ノ領村ヨリ西ニ中テ善峯道ア

り。道ノ傍右ノ方山下ニ大ナル塚アリ。土人高塚と云フ。疑フラクハ此ナル歟。

(句読点は筆者による。)

ここで、白慧はまず『延喜式』では桓武天皇の皇后が葬られた「高島陵」は乙訓郡に所在すると記されるものの、現在では位置が不明であると述べる。その候補に井内村以西の善峯道で確認した塚を挙げ、地域住民が「高塚」と呼んでいることも傍証に高島陵に比定する。高塚は京都市西京区に位置する芝1号墳と考えられる。現在、高島陵は芝1号墳の西1kmに治定されており、白慧の実証の蓋然性は低い。しかしながら、着目すべきは文献と現地での観察に加えて、地域住民からの聞き取りを実施している点である。

本特集恵谷報告の表1には「地域住民」が頻出するが、これは他の古墳に対しても同様な聞き取りを行っていたことを意味する。類例として久津川古墳群の記述を掲出する⁷⁾。

○指月塚 民居ノ異ニ在リ。伝云月見ノ楼アリシ所ト。封地今尚高壇ナリ。

○車塚 同所ノ東大和街道ノ東ニ在リ。形南北ニ亘テ山の如し。是レ即チ送葬スル車ヲ蔵ムル也。同キ西ノ方街道ノ西ノニ大ナル塚アリ。是レ即チ送葬ノ塚ナルベシ。由緒詳からず。

○鴻島 塚ヲ云フ。車塚ノ子丑ノ間ニ在リ。

○梶塚 車塚ノ北ニ在リ。

右ノ号土人ノ口称ナリ。総ジテ此辺ニ塚多シ。土人ノ云ク、寛文年中ニ田間ヨリ長五尺余ノ骸骨出ツ。其外朱沙多クアリシト。

(句読点は筆者が改めた。)

ここでは、地形や形状に対する観察の他に、地域での塚の呼び名や半世紀前の人骨の出土状況に関する伝承に記述の重点が置かれている。

こうした古墳叙述は、同時代の知識人に共通する。たとえば、白慧と同じく京都を拠点に活躍した黒川道祐(1623-1691)は京都地誌『雍州府志』で聞き取りと古記録を対照させて批判的に地域の伝承を検討して

いる。さらに貝原益軒(1630-1714)も京都から吉野への案内記である『和州巡覧記』でさまざまな陵墓に関して「里老」からの聞き取りと『延喜式』などの古記録を掛け合わせて古墳の歴史を再構成している。

いずれの地誌作者も現地での観察と聞き取りに基づく情報を、古記録の内容と照合させていくことで過去への探究を試みていた。ここで参照される古記録の多くが『日本書紀』や『延喜式』といった奈良・平安時代以降に編纂された書物であることは重要である。白慧らが活躍した元禄期の京都では、これら古記録の出版が進むとともに、公家社会に近い知識人からなるネットワークがその貸借を可能にしていた⁸⁾。そのネットワークの中核に位置した松下見林(1637-1704)が、『前王廟陵記』(1696年)で歴代天皇陵に関する古記録類の記述を集成したことは、この時期の古墳をめぐる知の到達点を示している。

同時に、こうした古記録に依拠する以上、彼らが遡りうる年代は制限される。基本的に有史時代を叙述する『延喜式』や『日本書紀』から、古墳時代の様相は捉えがたい。それゆえ、彼らは天皇や貴族の陵墓の比定や考証をおこなうが、相当する記録がない古墳に対しては「惜しいかな、然るにその実をあきらかにせず⁹⁾」とため息を漏らす。

(2)「車塚」言説の紆余曲折

こうした近世知識人たちの探究では、特定の言説が継承されたり変容したりするなかで、古墳に関する知識が蓄積されていった。例として「車塚」に関する言説の推移に着目したい。

一般に、車塚とは前方後円墳の形状を宮車に見立てた呼び名と理解される。しかしながら、この説は蒲生君平(1768-1813)が「前方後円墳」の命名に際して生み出した解釈であり、それ以前の地誌類では御陵に附属する、「天皇の車を埋めた塚」と理解されてきた¹⁰⁾。

この点を踏まえ、近世・近代初頭の地誌類を収録した『京都叢書』シリーズから山城国各所の「車塚」の記述をその由緒ごとに示した(表1)。丸川が指摘するように¹¹⁾、由緒が記された地誌の多くで天皇の車を埋めた塚という言説が展開されている。

その先駆例は、黒川道祐『雍州府志』の車僧塚に関

表1 近世京都地誌における「車塚」の記載と由来

書名	成立年 (出版年)	王塚 (深泥池)	車僧塚	光格天皇陵	南の車塚 (光格天皇陵)	(桓武天皇陵 の陪塚)	久津川車塚古墳	王塚 (梅津村)	今里車塚古墳	山田車塚古墳	南の車塚 (文徳天皇陵)	物集女車塚古墳	(長岡陵南の車塚)	(八幡車塚)
「嵯峨行程」	1680		▲											
「東北歴覧之記」	1681	○												
『雍州府志』	(1682)		●					●	○					
『京羽二重織留』	(1689)		●											
『名所都鳥』	(1690)		●											
『京城勝覧』	(1706)			▲										
『山州名跡志』	(1711)				○	●	●		○	○	●	●	○	○
『山州名跡巡行志』	(1754)				○	○	○		○	○	○	○		
『都名所図会』	(1780)					●								
『伏見鑑』	(1780)					●								
『拾遺都名所図会』	(1787)				○	●	○					●		
『京華要誌』	(1895)											●		

○は車塚を記載するもの、●は車塚を「車を埋めた塚」とするもの、▲は車塚を「車の形状をなす塚」とするもの

する記述である。この記述はそのまま『京羽二重織留』や『名所都鳥』に踏襲された。ただし、道祐が『雍州府志』編纂のもととしたとされる自身の紀行文「嵯峨行程」では、「予を以て之を見れば、則ち其の形車塚なり」と、形状から車塚と判断している。『京城勝覧』にも形状に即した車塚解釈があることを勘案すると、1680年代から1700年代には2つの車塚認識が存在していたのかもしれない。

対して、『山州名跡志』以降では「車を埋めた塚」という車塚観が支配的になる。同書において、由緒を記す4ヶ所の「車塚」は、すべて「天皇の車を埋めた塚」と表記される。丸川は、白慧が先行する地誌を参考として「車を埋めた塚」という説を敷衍したとしている¹²⁾。しかし、表1を見る限り、『山州名跡志』で「車を埋めた塚」とされた古墳について、先行する地誌にはそうした記述は存在しない。むしろ白慧は独自の調査と感覚で「車を埋めた塚」と推認した可能性が高い。

そのうち、天皇の杜古墳の南に位置した車塚に関しては着目すべき記述がある。白慧が調査で訪れた当時、天皇の杜古墳が位置する陵村の住民たちは古墳に天皇陵を示す立札を設けていたという（ただし札には白慧らが埋葬者とする文徳天皇ではなく桓武天皇の陵と記されていたようだ）。天皇の杜古墳は中世から天皇陵

とみなされており¹³⁾、立札の存在からは白慧の来訪時には村民たちの間にもその認識が浸透していたと考えられる。こうした地域側の認識の存在を踏まえるならば、古墳の南に位置した車塚についても、住民によって天皇や天皇陵に関連するなんらかの意味が付与されていたとも想定でき、「天皇の車を埋めた塚」という伝承が存在していたとしてもさして不思議ではない。『山州名跡志』における他の車塚言説の成立事情は不明だが、天皇の杜古墳前の車塚の場合、地域側の伝承をくみ取る形で記述が成立した可能性もあろう。

一方、こうした伝承を持たない車塚にも「車を埋めた塚」というイメージが付与された。その例が物集女車塚古墳である¹⁴⁾。同古墳が位置する物集女村は、近辺に淳和天皇が埋葬されたという古記録の記述から、幕府による元禄期の修陵事業のなかで着目された。その結果、村側は「何の伝承もない」と述べていた丸塚と車塚がそれぞれ淳和天皇御陵と御車塚とされ、それ以降高札や柵が設置されていった。

やがて幕末に到り、前述の蒲生君平による車塚＝前方後円墳という理解が広がると同時に、車塚（前方後円墳）に対する年代観も見直された。つまり、宮車の形状をなす「車塚」は元禄期に想定されていた奈良・平安時代以降ではなく、より以前の遺跡と考えられるようになりつつあった。物集女車塚古墳も同様に、前

方後円の形状をなす「車塚」であるために淳和天皇の時代よりも以前のものと考えられ、「御車塚」ではなくなった¹⁵⁾。

近代考古学者たちは、蒲生君平の車塚理解を継承しつつ、一方では古記録や伝承も傍証として取り入れた。次にその様相を確認しよう。

2. 近代における古墳への調査と顕彰

(1) 明治・大正期の考古学者による古墳調査

「日本考古学の父」と称される京都帝国大学教授の濱田耕作は、青年期から京都盆地の古墳群に対して調査をおこない、明治35年（1902）、21歳の濱田は古墳群を地理的なまとまりから7グループにわけて紹介している。そこでは、たとえば、現在京都市伏見区に位置する番神山古墳について、それまでの地誌や歴史書では『延喜式』にみえる深草墓と比定されてきたが、「総じてかゝる形式の古墳は奈良朝以前とするを通常とすれば、藤原氏時代のものと考えふは決して穩当といふ可からず」¹⁶⁾とこれまでの理解を是正している。青年期の濱田はすでに、元禄期からの歴史学的手法の限界を乗り越え、遺物と遺跡から過去に迫る考古学的見地を確立させていたことがうかがえる。

ただし、濱田がそれまでの記録や伝承を捨象したわけではないことは、その文章末尾に挙げた「古墳研究の要目」9箇条に「口碑記録等」が含まれていることから明らかである。

濱田の後任者である梅原末治も、「口碑記録等」を調査項目に取り入れていた。『久津川古墳の研究』¹⁷⁾では、古墳の旧状を古老から聞き取り、また近世地誌類にも目を配り、『山州名跡志』の記述を引用している。

梅原の考古学は思想性に欠けるものの、禁欲主義的に遺物の収集および記述に注力するスタイルであったと評価されている¹⁸⁾。前章表1の出典に梅原の報告が目立つのは、彼の記録が調査時の古墳の伝承や様相をよく叙述しているからにほかならない。

記録や聞き取りから得られた古墳の被葬者にまつわる伝承について、梅原は考古学的見地に即して基本的には否定的な態度をとる。しかし、地元で継体天皇皇

子の陵墓と伝わる京田辺市の大住車塚古墳については、古墳の型式から年代を考えたうえで、「(築造年代を)継体天皇代ニ置クコトハ必ズシモ排スベキニアラザルニ似タリ」¹⁹⁾と理解を示す。自身の考古学的見地を基準にして、「口碑記録等」に判断を下していたといえよう。この点は古記録を武器に地域の伝承の是非を正していた近世地誌の作者とも重なる。

なお、古墳の現状や石棺などの出土の経緯を当事者から詳しく聞き取るのも梅原報告の特徴である。乙訓地域の古墳は、筥畑への土取りのため削平されることが多いのは恵谷報告の通りである。削平の理由について、近年の報告書では「筥藪への土入れのため」といった簡潔な表現で済まされることが多い。対して梅原は「塚ノ封土ガ砂利ヲ混ゼル赤土ヨリ成リテ、竹根ニ施スニ適セルヨリ」²⁰⁾、と土取りの理由にまで言及する。梅原は極度の近視などの身体的条件もあり、遺跡よりも遺物の分析に注力したとされる²¹⁾。そんな梅原でさえ、上記のように遺跡の周辺にまで記録を残したことは興味深い。

(2) 古墳の顕彰をめぐる学術と地域

考古学的な調査が進展すると同時に、古墳に対する歴史的価値が共有されていった。行政的には、陵墓の治定が明治後期に完了すると、大正8年（1919）の史蹟名勝天然紀念物保存法で「古墳及著名ナル人物ノ墓竝碑」が文化財としての保存対象となった²²⁾。

京都盆地においては、こうした動きとは別に、地域住民のなかに古墳に歴史的な価値を見出し、地域の文化遺産として顕彰・整備しようとする者が現れた。その顕著な例が、三宅清兵衛と西村芳次郎、そして濱田耕作による古墳への建碑である。三宅清治郎は、京都の織物商三宅安兵衛の長男であり、父の遺言に従い、古墳を含む京都近郊の名所旧跡に対して案内碑や道標を計400基程度建立した²³⁾。現在も「京都三宅安兵衛依遺志建之」と刻まれた道標を京都府南部の各地で見ることができる。西村芳次郎はその協力者であり、地元八幡周辺での建碑事業を主導した。碑文の揮毫者のなかには当時の文化人や京都帝国大学の歴史学や考古学の教授がおり、濱田耕作はその1人であった²⁴⁾。

濱田の揮毫が見られる「三宅安兵衛碑」はすべて陵



図1 「山伏大筒木真若王命御墓参考地」碑



図2 「泉南 濱田青陵書」の刻字

墓や宮都といった天皇や皇族関連する史跡であった²⁵⁾。このうち、東車塚古墳と西車塚古墳には、それぞれ「山伏大筒木真若王命御墓参考地」、「母泥之阿治佐波毘賣命御墓参考地」と刻まれた碑が建ち、側面には「泉南 濱田青陵書」の刻字がみえる(図1・2)。

中村によると²⁶⁾、西村は自邸(現在の松花堂庭園)が立地する東車塚古墳を、八幡を含む綴喜郡に所縁がある人物である「山代之大筒木真若王」の陵墓とすることで、自邸の権威付けを図ったという。さらに、碑に「参考地」と付されているのは、八幡地域の発掘調査で世話になった西村からの揮毫の依頼を断り切れなかった濱田が、山代之大筒木真若王の墓ではないことを悟りつつも記したあらわれであるという。

石碑建立の10年前に出版された梅原末治の『久津川古墳研究』において、東車塚古墳と山代之大筒木真若王との関連性は一切指摘されていない²⁷⁾。同書に序文を寄せる濱田がこの点を把握していないはずもない。やはりこの碑をめぐるのは、帝大教授のお墨付きを得たい西村と、考古学的事実と相違する碑を建てることに躊躇いがある濱田の葛藤を垣間見ることができよう。

西村と濱田の歴史探究の手法に着目すると、両者の違いはより鮮明になる。西村が郷土の歴史を考えるにあたって主に参考としたのは、『山城綴喜郡誌』と『京都府史蹟勝地調査会報告』であった²⁸⁾。『山城綴喜郡

誌』は地域の地勢や歴史、史跡や伝説を記す明治41年(1908)作成の地誌である。西村の歴史探究に影響を与えたと考えられる「名趾城堡」の記述は、名所旧跡に関する古記録や伝承を書き留めるもので、『山州名跡志』などの近世地誌の伝統を引く。一方、『京都府史蹟勝地調査会報告』は京都府内の史蹟や名勝の学術調査報告で、梅原末治も執筆者となっている。近代考古学の手法を確立させていた濱田に対し、西村は近世以来の手法と近代アカデミアの成果を織り交ぜて歴史を考えようとしていたのであろう。

東車塚古墳への建碑の場合、西村は自身の意図を達成する目的もあり、学術的な成果ではなく古記録や伝説を採用したといえよう。彼が古墳の被葬者と託した「山代之大筒木真若王」は『古事記』などに登場する伝承上の人物であり、彼は古記録や伝説から王の名を見出し、歴史の考証・創造に利用したと想定できる。

昭和初年の段階では、古墳の歴史を考える上で濱田や梅原のような近代考古学に即した学術的方法が確立していた一方、地域の名士層では依然として古記録や伝説も重要な論拠とされていた。古墳に「トンデモ」な伝説がつきまとう状況は現代でもそう変わらないかもしれない。

おわりに

古墳が多様に利用されてきたように、古墳にはさまざまな角度から思索が加えられてきた。埋蔵文化財行政が整備された今日において、古墳は考古学的見地から歴史上の価値が調査・評価されることが固定化してきている。しかしながら、発掘調査以外にも古記録や伝承を重視して古墳の歴史を捉える知的営みが変化しつつも展開してきたことは以上に述べたとおりである。こうしたアプローチは、近世から近代、現代と考古学的調査が体系化するにしたがって顧みられなくなりつつある。この思索が求める歴史や伝承が事実ではないとしても、その営み自体には決して一面的ではない豊かな古墳像が秘められていることを付言して稿を閉じたい。

【註】

- 1) 山田邦和 2021「考古学史の散策〈28〉京都府の考古学史」『考古学ジャーナル』759
- 2) 日本史研究会京都民科歴史部会 1995『「陵墓」からみた日本史』青木書店など。
- 3) 長谷川奨悟 2009『「雍州府志」にみる黒川道祐の古跡観』『歴史地理学』51（3）。
- 4) 前掲（1）
- 5) 塩村耕 2000「民俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」『調査研究報告（国文学研究資料館文献資料部）』21。
- 6) 新修京都叢書刊行会 1967『新修京都叢書第十八巻 山州名跡志 乾』、p.338。
- 7) 新修京都叢書刊行会編 1968『新修京都叢書第十八巻 山州名跡志 坤』臨川書店、p.94。
- 8) 竹内祥一郎 2020「貝原益軒による藩撰地誌編纂と地理的知識の形成」『人文地理』72（1）
- 9) 新修京都叢書刊行会 1968『新修京都叢書第十巻 雍州府志』臨川書店、p.794。
- 10) 丸川義広 1994「山城の御陵と車塚―江戸時代の地誌にみる車塚の由来―」『文化財学論集』文化財学論集刊行会編。
- 11) 前掲（10）。
- 12) 前掲（10）。
- 13) 下中邦彦編 1981『京都府の地名（日本歴史地名大系第26巻）』平凡社。
- 14) 向日市文化資料館 1999『御車塚から車塚―乙訓の古墳と陵墓―【最新情報コーナー展示案内資料】』。
- 15) 前掲（14）。
- 16) 濱田耕作 1988「京都附近の古墳」『濱田耕作著作集 第1巻 日本古文化』濱田耕作著作集刊行委員会編、同朋舎（初出：1902『嶽水会雑誌』第16号）、p.17。
- 17) 梅原末治 1920『久津川古墳研究』名著出版。

- 18) 穴沢啄光 1994『梅原末治論』『考古学京都学派』角田文衛編、雄山閣出版。
- 19) 梅原末治 1922『大住村車塚古墳』『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊、p.73。
- 20) 梅原末治 1920『川岡村岡ノ古墳』『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊、p.56。
- 21) 前掲（18）。
- 22) 尾谷雅比古 2008「制度としての近代古墳保存行政の成立」『桃山学院大学総合研究所紀要』33（3）。
- 23) 中村武生 2001「京都三宅安兵衛・清治郎父子建立碑とその分布―大正期及び現京都市域を中心に―」『花園史学』22
- 24) 前掲（23）。
- 25) 中村武生 2018『「三宅安兵衛遺志」碑と八幡の歴史創出』『八幡の歴史を探究する会会報』83
- 26) 前掲（25）。
- 27) 前掲（17）。
- 28) 前掲（25）。